

京都芸術劇場

Newsletter
shunjuza
studio21

vol.49
2021.4

ニューズレター



京都芸術劇場は今年、20周年を迎えました

特集 村川拓也『事件』

ホワイエ 桂米團治、池内亜希
2021年4～7月公演スケジュール

— 2P-5P

— 6P-7P

— 10P-11P

京舞と狂言 vol.2

— T・2P-T・5P



村川拓也『事件』

2021年5月14日(金)、15日(土) 18:00
16日(日) 15:00

会場：春秋座 特設客席

演出：村川拓也

●公演情報の詳細はスケジュール一覧(P.10)をご覧ください。

この企画は、舞台芸術研究センター「共同利用・共同研究拠点」のプロジェクトとして、実際にスーパーで起きた「事件」を題材とした新作公演の発表を目指した研究活動を、京都を拠点に活動する演出家・村川拓也さんと共に行ってきました。

2021年2月には、非公開での劇場実験公演を春秋座にて上演し、5月の本公演に向けた準備をすすめてきました。このインタビューでは、作品内容について演出家の村川さんに話を伺います。

スーパーはその事件が起きたことによって
一度、機能停止、役割を停止したのではないか。
スーパーという機能が停止した瞬間に
改めてスーパーというものが
くっきりと見えたのではないかと思ったんです。

——今回はいつもの村川さんの作品とは違い、実際にご自身が体験したスーパーでの「事件」を題材にした作品を上演するわけですが、何を現場でご覧になったのですか。

3年前、まだ1歳にならない娘をおんぶして、遅めの昼ごはんを買いにスーパーの惣菜売り場を見ていた時、レジの方から悲鳴のような声が聞こえてきました。詳しくは覚えていないのですが、悲鳴といっても「キャー」ではなくて、「あ、あ、あ」みたいな声で、なんやろうと思って見たら店員さんやお客さんがパニック状態になっていて。最初は、変な人が店員さんに抱き着くとか体を触るとかしたのかと思っただけだったのですが、レジの近くで茫然としていた男性が、「刺しよった、刺しよった」「逃げよった、逃げよった」とパニック状態で連呼しているのが聞こえました。

それで、すぐに逃げなくてはと思うつつ、何が起こったのかと恐る恐る見に行くと、そこに人が倒れていて、その下にドラマで見るような血溜りがありました。これはマズイと思ったのですが、ただ、その時にふと店の奥に目をやると、その事件に気がついていない沢山の人が、まだ買物を続けていたり、休憩場所のような場所でまだ座り続けている人がちらほら見えて、そのことにすごく驚きました。

それからスーパーを出て自宅に帰

るあいだ、どこに犯人がいるのかわからず、緊張しながら外を歩きました。家に帰ると、やがて報道ヘリのパタパタパタという音が聞こえてきて、Twitterで調べると、スーパーで刺傷事件が起きていたことがわかりました。

スーパーと消費社会に 対する苛立ち

——本作はその事件を題材としながらも、スーパーという場所自体をテーマにした作品でもありますね。

元々、スーパーやショッピングモールに対する苛立ちのようなものがあったと思います。その棚に並ぶ商品を欲しい人がいるからその建物があるのはわかるのですが、自分の思いや好みより早く、「これが良いですよ」「これを買うと良いですよ」と言われ続けているような、勝手に自分の欲望を煽られ続けているような感じがします。

ただ、スーパーに苛立ってはいたけれど、実際にそれを使って普通に生活もしているし、逆に居心地が良いと思ったりもします。なので、排除したいと考えているだけではなく、そういう居心地の良さのような、両方の感じをスーパーやショッピングモールに対して感じ続けていて、スーパーに対する関心は以前から持っていました。

また、このスーパーでの刺傷事件

を経験した少し後に、筒井潤さんの『破壊の予ら』という作品を春秋座で観ました。舞台上舞台の作品で、両側から客席に挟まれた小さな舞台上に、沢山の服が掛けられた洋服掛けが置かれていて、それが一見、服売り場に見えたんです。また、スーパーにかかっていそうなチープなBGMが流れるシーンがあって、それも面白くて。その作品を見ている時に、スーパーにまつわる自分の記憶のようなものを思い出したりして、スーパーを扱った作品ができるんじゃないかと思いました。

そうやって今回の作品のことを考えるようになっていたのですが、最近読んだ本の中に“その人の存在感が一段と増す時は、その人が死体になった時だ”というのがあって。それを書いた人は「死体になってようやく生命が生まれた」という言い方をしていたのですが、それが奇をてらった言い方ではなく、実感として理解できるように思えて。

というのも、事件の起きたスーパーはその事件が起きたことによって一度、機能停止、役割を停止したのではないか。スーパーという機能が停止した瞬間に改めてスーパーというものがくっきりと見えたのではないかと思ったんです。

事件が起きているのに、まだ買物をしている人や休憩場所に座っている人たちが異様に見えたのは、そういったことがあったんじゃない

かと思います。本の言い方を借りれば、事件が起きたことで、やっとスーパーが生き活きと生命を持ち出したと言えるのかもしれないと。

演劇と時間について

—— 3月に行われた劇場実験では、どんなことを試そうとしたのでしょうか。

普段の自分の作品では、俳優ではない誰かと出会い、その人自身のことを舞台上で表現することが中心です。例えば介助士の方に普段の仕事風景をそのまま舞台上でやってもらったり。その意味では、今回の作品の場合は当事者のような方も出演しませんし、これまでと大きく違っています。

また、普段の作品は、基本的に舞台上には物をほとんど置かず、観ている人に全て想像してもらって完結するようなかたちになっていて、それは舞台が持っている一つの大きな機能だと思っています。

ただ、今回の劇場実験では、現物の持っている力強さを見てみたいと思いました。それで実際に、スーパーの野菜売り場などに並んでいる什器や商品棚などを劇場に持ち込み、その棚に野菜などの商品を並べてみました。

スーパーの棚にズラリと並んだお菓子のパッケージは「これを買え」というようなデザインがされています。パックの肉も美味しそうに詰められて、購買意欲を高めるようになっています。もちろん作る側はそこを頑張っているのですが、逆にそれが圧力にも思えるというか、自分で選んでいるけれど、もしかしたら買わされているかもしれない。そういう「どンドン買え」というようなえげつないグロさや、想像ではなく現物で表現できないかと、色々なことを試しました。

ただ、舞台上に現物を置くというのは相当難しかったです。舞台上というのは「何か」を想像させる場所であって、その「何か」を実際に置いてしまうと、それ以上イメージがわからないんですね。ポテトチップスの袋を置いてしまうと、それ以上でもそれ以下でもない、新たなイメージもわからない。面白くなるはずと思って色々試そうとしたのですが、イメージする事を止められると、ただ、ぼーっと見てしまう。

——実際のスーパーで感じるような、物がワーッと押し寄せてくる感じではなかったと。

はい。それは例えば、大量に商品を置いてもたいして変わらないと思います。演劇、舞台を作っている人はおそらくわかると思うのですが、なぜか舞台には実物が置けない。イメージが止まってしまうというか、日常的に見ている感じのままで置くこともできないし、かといって意味が過剰になることもない。

自分の普段の作品では、日常を誇張することで、全く違う意味が見えたり、気が付かないものに気付いたりするような時間をつくってきました。今回、劇場にスーパーを具体的に再現することで、同じような時間がつくれると考えていたのですが、そうはなりませんでした。

実験を通じて改めて気が付いたのは、舞台はビジュアルではなく時間で成立しているということです。だからスーパーにある什器や商品を並べても、出オチというか、面白いのは最初の5分だけです。多分、それが什器や商品が持っている時間の限界で、それを出演者がどうしようが時間が前に進んでいかないんだと思います。

例えば、何も無い舞台に人が歩いてきて、何かを喋って帰っていくのは、歩くことや、喋る内容、帰ることが面白いのではなく、その一連

の流れが続いている時間が面白いということだと思います。一つずつが流れを作っていて、その流れを作るのが舞台でできることであって、それは、舞台に現物が置かれているかどうかとは別のことなんだと思います。

——村川さんの今までの作品は俳優ではなくて当事者の方が出てきますね。現物は5分しか時間がもたないけれど、本当の介助士が出てきた場合は同じことは起こらないわけですね。

時間との関わりで言えば、人の場合は動くけど、什器は動かないので時間が進まない。だから例えば、什器のライトを付けたり消したり、冷蔵のモーター音を聞かせたり、あるいは壊したり、回したりして什器が独自の時間を持って変化しないと難しい。

ただ、現物を置けないというのは、面白いことやなと思います。どうして物が置けへんのかなと改めて考えたりしながら、ふと能のことを思ったりしたのですが、能って舞台上に何もなくて想像して観ますよね。もしかしたら日本人は、そういうことが好きだったり得意だったり、そういうことが、文化的にあるのかもしれないし、それも原因なのかなと考えたりしました。

——過去の作品でも、例えば車いすを使う時、車いすそのものは使わずパイプ椅子で表現したりしていましたね。

そう。だからずっと考えていたことではあるんですよ。なんで車いすは使えへんのかなという疑問と同じような問いを、今回の舞台に詰め込もうとも思っています。なので今は、劇場実験で上演したものと別な考え方になってきています。ただ現物を使って再現すればいいということから離れた考え方です。

3日間の劇場実験でも、途中で一

度だけ試してみたんです。什器をどかして舞台に何も置かない状態で、買い物をするというシーンを数時間だけ稽古して。そしたら、それがすごく面白くて。もちろん、什器を並べるのが面白くなかったから、それがなおさら面白く見えただけかもしれませんが、舞台に何も置かれていない方が、見ている側の想像の幅が広がるし、試したいことも増えました。

とはいえ、初めに考えていたことの全てが台無しになったのではなく、劇場実験のなかで面白い発見も沢山ありました。劇場実験をするまでは、スーパーを再現して消費社会の持つグロさを出して、そこで人が刺されるという物語のような一本軸を考えていたのですが、什器を置かないのであれば、例えば舞台はスーパーだけでなくでもいいんじゃないか。それまでは、犯人が人を刺すところまでの理由や感情の流れを作らないといけないと思いながら稽古を続けていたのですが、言い方が悪いですが、この作品に現れる犯人にとって、刺す相手は誰でもいいのかもしれないし、誰でもやりえるかもしれない。だから「ほら、やっぱりあの人、人を刺したわ」というような流れをつくるのではないことの方を大事にしながら、そちらを考えていく方が今は正解なんじゃないかなと、稽古や劇場実験を通じる中で考えるようになりました。

ルーティンだけを羅列する

それと、この間、知らない人のツイートですが、“私はドラマらしいドラマがなくて出来事だけが羅列している作品が好きです”と書いてあるのを読んで、今回の稽古場でやっていたことに近いなと思いました。あるドラマを作るというより、スーパーで起きる出来事、情報をただ並

べていくということ。そういう作品になったらいなと思っています。

また、スーパー自体がそういう場所だとも思います。買い物をしてレジに持って行ってピッとしてもらって帰るだけなので、そこに人間の感情や大きなドラマはなくて、ただただルーティンのように繰り返される出来事と情報だけがある。例えば店内のBGMや企業が作っているCMのモニター映像、魚売り場のおじさんが今日はこれが安いよといったカセットテープが流れていたり、そういう情報だけが溢れている。

スーパー自体が出来事だけで出来ている場所だからこそ、作品でもそういうことが出来るのではないかと思います。そして、ルーティンのような出来事しかない場所であるにもかかわらず、そうじゃない事件があったからこそ、スーパーはその機能が停止したのかなと思います。

ただ、もう少し引いた目で見ると、人が人を刺してしまうということも、社会生活のルーティンの一つであるかのように扱われてしまっているのかもしれない。本当はルーティンのように考えてはいけないのに、もしかしたら我々は、例えば、刺傷事件のような出来事を一つの単なるよくある出来事として解決してしまっているのかもしれない。

実際、そのスーパーも、事件が起きた3時間後ぐらいに、営業は再開しました。様子を見に行ったら、事件を知らないお客さんがどんどんお店の中に入って行ってました。スーパーからしたらあまり長い間閉めていると何があったってなるし、イメージが悪くなってしまうのかもしれない。こういった事件というのは、我々の社会生活のルーティンに常に覆い隠され、なかったことにされてしまう出来事なのだと思います。



撮影：蒋国清

村川拓也（むらかわたくや）

演出家・映像作家。1982年生まれ、2005年京都造形芸術大学（現京都芸術大学）卒業。京都市在住。ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を、映像・演劇・美術など様々な分野で発表し、国内外の芸術祭、劇場より招聘を受ける。1人のキャストとその日の観客1人を舞台上に招き、介護する／されることを舞台上に再現する『ツァイトゲーバー』（2011）は国内外で再演され、2014年にはHAU Hebbel am Ufer（ベルリン）の「Japan Syndrome Art and Politics after Fukushima」にて上演された。16年東アジア文化交流使（文化庁）として中国・上海／北京に滞在。近作、『インディペンデント リビング』はKYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2017で初演し、テアターフォルメン（ブラウンシュバイク、2018）に招聘された。セゾン文化財団ジュニア・フェロー。

コロナ禍を生き抜くには「フィガロ」の精神で！

オーストリアのザルツブルクに生まれ、首都ウィーンにて35歳という若さで他界するまでに600曲以上の音楽を生み出したヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。彼はオペラを書くためにこの世に生まれてきたと言っても過言ではありません。それまでのオペラとは全く次元の異なる作品を確立したのです。

駆け落ち同然の結婚で故郷を飛び出し、妻コンスタンツェと同名の登場人物を主役にして作曲した歌劇『後宮からの逃走』。元気あふれる作品に一定の評価は得たのですが、当時の音楽界はイタリア至上主義。ドイツ語のオペラでは世界に通用しません。そこで生まれたのがイタリア語のオペラ『フィガロの結婚』です。

フランスの劇作家ボーマルシェがスペインを舞台に書いた戯曲『狂おしき一日、フィガロの結婚』を、脚本家ダ・ポンテがイタリア語のオペラ台本にして、モーツァルトが曲をつけました。序曲から心沸き立つ旋律です。保守的なウィーン市民はさぞや強烈な衝撃を受けたことでしょ

う。なかなか自分の才能を認めてもらえず、憤懣やるかた無かったモーツァルトが、全身全霊を込めて書き上げた様子が見て取れます。

アルマヴィーヴァ伯爵に仕えるフィガロとスザンナ。二人がまさに結婚しようとする日に、伯爵が「初夜権を復活する」と言い出したのです。領主たる者は、そこに仕える女が誰かと結婚する際、嫁ぐ前に一度“味わう”ことができるという権利の復活を……。そうはさせじと奮い立つフィガロ。そこへ今度は伯爵夫人のロジーナに恋心を打ち明ける少年ケルビーノが現れたり、フィガロの出生の秘密が発覚するなど、てんやわんや。この顛末を、空中分解させることなく、しっかり繋ぎ止めているのがモーツァルトの音楽なのです。最後は伯爵夫人の赦しで大団円。

コロナ禍で世界的に新しい生き方が求められる時代の到来。世の中の変化に笑顔で対応し、どんな難関をも身軽に乗り越えられる直感力を持つことが重要となります。それには『フィガロ』の鑑賞が一番！

愛と調和の世界を、ごゆるりとお楽しみあれ♪



桂米團治

落語家

1978年大学在学中に、父である桂米朝に入門、桂小米朝を名乗る。2008年、五代目桂米團治襲名。華やきを大切にしながら古典落語を追求、独自の世界を構築している。また、自身をモーツァルトの生まれ変わりと信じ、クラシックへの造詣が深いトークでオーケストラと多数共演。「王道を見失わずに歩む」のが信条。

CLIP

渡邊守章さんが日本芸術院 会員に選定されました

昨年12月、芸術活動で顕著な功績があったとして舞台芸術研究センター前所長であり、フランス文学者で演出家の渡邊守章さんが日本芸術院会員に選ばれました。

京都市芸術新人賞に 木ノ下裕一さんが選ばれました

本学、映像・舞台芸術学科の卒業生で、木ノ下歌舞伎主催の木ノ下裕一さんが、令和2年度の「京都市芸術新人賞」を受賞されました。この賞は、京都市出身者または京都市内において活発な文化芸術活動を行い、全国的にも評価を高め、将来を嘱望される方々に贈られるもの。おめでとうございます。

BOOK

新刊 『現代アートを殺さないために ソフトな恐怖政治と表現の自由』

『Realkyoto Forum』編集長で本学教授、舞台芸術研究センター主任研究

員である小崎哲哉による書き下ろしの新刊が発売されました。

2020年12月
河出書房新社
2970円(税込)



やってみたら面白いんちゃうの

落語家として舞台に上がったかと思えば、経営者として事務所の机に向かう。もちろん、若手の育成にも励み、落語の魅力を広く発信できる方法はないかと、ネットの活用も模索する。

上方落語を先導する落語家・桂米團治。1978年、父である桂米朝入門し、2008年に五代目米團治を襲名した。米朝の死後、18年には、落語家が数多く所属する「米朝事務所」の社長に就任。多忙な日々のはずだが、とにかく自らが動く。そして、新しいことにも果敢に挑むのである。

昨年、新型コロナウイルスの感染拡大が少し落ち着いていた頃のこと。予定する公演の魅力を伝えようと、一人、東京を訪れてきて下さった。歌舞伎の人気演目「勧進帳」を米團治流に語り、見せるという挑戦的な公演。なぜやってみようと思ったのか尋ねると、こう言った。「やってみたら面白いんちゃうのって思うんです」

その言葉こそ、真意なのだろう。人は、年を取り、経験を重ねていく

中で、だんだん、何でも億劫になりがちだ。誰かがやってくれるならばお願いしたい。面倒なことならば、特に。新しいことに臨むのだって、失敗がよぎり、怖い。しかし、米團治はどうだろう。「それなら、やっちゃおうよって」そう、いたずらっぽく笑うのだ。

その意欲や行動力は、だんだんと皆を巻き込み、うねりを生む。

社長への就任も、当初は前向きでなかった。米朝が世を去り、「やっと自分のことに専念できる」との思いも抱いていた。だが、周囲の声もあり、「やってみよう」と決断した。そして今や、「やれることはやりたい」と突き進む。不慣れなこともあったかもしれない。それでも、懸命に自ら進もうとする姿は、じわりじわり、周りをほだす。

落語とオペラという組み合わせに驚きもあった「おべらくご」も、すっかり定着した。米團治のチャレンジ精神。加えて、それに駆り立てられた者たちの努力の賜物だ。今回は、どんな挑戦が見られるか、楽しみである。(敬称略)



池内亜希

読売新聞東京本社文化部 記者

2010年、読売新聞大阪本社入社。岡山支局、大津支局で勤務後、16年より、大阪本社文化部記者。主に、落語や浪曲、講談、漫才など演芸分野を担当する。昨年秋から、東京本社文化部記者。ポップス音楽を担当するとともに、東京でも、上方演芸の取材を続けている。

BOOK

舞台芸術24号 発売！

古今東西のパフォーミング・アーツを今日的な視点で切り取り、21世紀における舞台芸術の新たな可能性について考察する舞台芸術研究センター機関誌『舞台芸術』の最新号が発売されました。

特集「言葉と音楽—〈日本語〉を越えて」収録内容(一部)

観世鏡之丞インタビュー

「能を支えているもの—謡と囃子、間とリズム、そして掛け声—」

いとうせいこうインタビュー

「日本語ラップ」から「ダブ・ポエトリー」へ

宮城能鳳インタビュー

座談会「地点語」と音楽 論考：藤田康城、大谷能生、他



2021年3月 KADOKAWA 1650円(税込)
購入は全国の書店、Amazon、京都芸術劇場HPより

2021年6月5日(土) 14:00

春秋座

劇場20周年記念公演

桂米團治 春秋座特別公演

お待たせしました! 3年ぶり6回目の特別公演!

上方落語界の重鎮、桂米團治の特別公演。2014年に始まり2018年から3年ぶり6回目の春秋座公演を行います。

1部では上方古典落語をきっちり口演し、2部は落語とオペラが合体した摩訶不思議なコラボ、米團治十八番の「おべらくご」の上演。米團治が大阪弁で何役もこなし、京都フィルハーモニー室内合奏団の選抜メンバーによる演奏とオペラ歌手も出演し、春秋座ならではの歌舞伎舞台機構を駆使してお見せします。今回の演目は、2015年に行った『ドン・ジョヴァンニ』（モーツァルト作曲）をさらに磨きをかけてお送りします。3時間近くのオペラが50分前後の落語に転化し、分かりやすく抱腹絶倒の米團治の名人芸をお楽しみ下さい。女たらしのドン・ジョヴァンニが放蕩の末、最後は奈落の底へ…スペクタクルなクライマックスを是非お見逃し無く!



2021年6月27日(日) 13:00/16:00

春秋座

田村友一郎『テイストレス』

現代アーティスト・田村友一郎による
初の劇場作品

既存のイメージやオブジェクトを起点に、従来の美術の領域にとらわれない独自の省察の形式を用いて、現実と虚構を交差させつつ多層的な物語を構築するインスタレーションやパフォーマンスを手掛けてきた現代アーティスト・田村友一郎が初の劇場作品を発表します。本格的な歌舞伎スタイルを基本としながら現代劇の上演にも対応できるよう設計された客席数約800席の春秋座。その劇場という環境を田村はどのように眺めるのでしょうか。ぜひ劇場へお運びください。

構成：田村友一郎

出演：山崎皓司、荒木悠

世界は「終わり」を迎えているのではない

世界はこれまで幾度も終わり

無限によみがえり続けてきた

ならば残された問題はただひとつ

その傍らで私たちはどうすればいいのだろうか?

(J.G. バラード『The Waiting Grounds』より訳出)



本公演は、本学、共同利用・共同研究拠点事業〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉2019年度劇場実験型公募研究プロジェクトII「The Waiting Grounds—舞台芸術と劇場の現在を巡る領域横断的試み」における研究成果に基づいています。

京都芸術劇場は20周年を迎えました。



市川猿之助
京都芸術劇場 春秋座 芸術監督

春秋座は私にとって、こけら落とし公演へ出演して以来、「亀治郎の会」を開催するなどゆかりの深い場所です。

2013年、二代目市川猿翁より当劇場の芸術監督としての役割を引き継ぎましたが、これまでも申してまいりましたとおり、劇場に命を吹き込むには、トップレベルの舞台を上演し、皆様にたくさんお運びいただくことが肝要です。春秋座を活かす余地はまだまだ広がっております。このコロナ禍でも皆様のご期待以上のものをご覧いただけるよう模索してまいります。

また、大学の中にある当劇場には学生の力が欠かせません。アルバイトやプロジェクトなど様々な形で多くの学生が本劇場に関わっております。そして、この20年の間に卒業生の中からプロの世界で活躍する頼もしい人材が育ってきました。学生・卒業生たちにも応援の声を賜いますれば幸いです。これからも、春秋座が本学の掲げる「京都文芸復興」の拠点として皆様に愛されますよう、お願い申し上げる次第でございます。

市川猿之助



吉川左紀子
京都芸術大学 学長

本年、京都芸術大学・京都芸術劇場「春秋座」は創立20周年を迎えます。春秋座は、「芸術立国」「京都文芸復興」という本学の建学理念のもと、魅力ある劇場空間を実現した、国内初の大学運営による劇場です。

創立以来、歌舞伎、演劇、オペラ、ミュージカルをはじめとする多彩な公演や、学術講演会、卒業作品発表会など様々なジャンルの企画に活用され、舞台芸術の振興と、芸術教育の充実に大きく貢献して参りました。多くの皆さまのご支援により、市民に愛される劇場として順調に発展してこれりましたことに、心より感謝申し上げます。

2020年4月以後、新型コロナウィルスの影響で、劇場を含む多くの公共施設の閉鎖が長びく中、春秋座では、早い時期から活動の再開に向けて徹底した感染症対策に取り組み、スタッフ総出で準備を重ねました。9月初旬、今回12年目を迎えた「立川志の輔 独演会」を開催し、公演再開の嚆矢となりました。本公演には、連日予想を超える多くの皆さまがご来場くださり、志の輔師匠の高座をご堪能いただきました。

そして、10月の春秋座芸術監督プログラム「市川猿之助 藤間勘十郎花形舞踊公演」以降も、感染症の状況を見極めながら「芸術の灯を絶やさない」を旗印に、2020年度内に予定していたすべての公演を、無事、実施することができました。困難な状況の中、素晴らしい公演を行ってくださった志の輔師匠、市川猿之助様、藤間勘十郎様はじめ関係の皆さまに心よりお礼申し上げますとともに、ご来場の皆さまのご協力に、厚く感謝申し上げます。

創立20周年を迎えた春秋座は、大学の中にあっても本格的な設備を備えた、他に類のない劇場として、これからも「実験と冒険」の精神で、さまざまな挑戦を続けてまいります。皆さまの暖かいご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

京都芸術劇場
ニュースレター

shunjuza
studio21

Newsletter

特集

村川拓也『事件』

京舞と狂言 vol. 2

T・2P
T・5P

2P
5P

京都芸術劇場は今年、20周年を迎えました

vol.
49

2021.4





「京舞と狂言 vol. 2」



京都の地で伝承され、独自の文化を育んでいる「狂言」と「京舞」。異種芸能でありながら両者が共通に持っているテーマを取り上げ、比較上演する三年連続企画の第二弾。京都芸術大学(旧名称・京都造形芸術大学)出身でもある、京舞の井上安寿子、狂言の茂山忠三郎が出演します。初回2019年度は「女」がテーマでしたが、二回目となる今年は「メルヘン」をテーマにレパートリー演目のほか、初の試みとなる京舞・狂言合作による新作も披露します。

2021年7月18日(日) 14:00

会場：春秋座

出演：茂山忠三郎、井上安寿子 他

企画：田口章子(京都芸術大学教授)

●公演情報の詳細はスケジュール一覧〈P.10〉をご覧ください。

撮影：桂秀也

演目紹介

今回は「メルヘン」がテーマ。メルヘンといっても童話やおとぎ話だけがメルヘンの世界ではありません。「メルヘン」を通して伝統芸能が伝えてきた日本人の伝統的価値観を発見しませんか？新作の『たぬき』は、かたや「舞」、かたや「せりふ」と表現方法の異なる

二つの芸能が一つの作品のなかでどのように融合しながらそれぞれの魅力を発揮するかが楽しみな演目です。あれこれ想像をめぐらせながら、芸能の世界が表現する「メルヘン」からみえてくる京舞と狂言の世界をお楽しみください。



Vol.1の舞台より 地唄『鉄輪』

【狂言】

『神鳴』

出演…神鳴 茂山忠三郎、医者 山口耕道、

後見 山本善之

気分良く雷鳴を轟かせていた神鳴（雷）さまがうっかり雲を踏み外して空から真つ逆さまに落ちてきます。そこに旅の途中の医師（狂言ではクスシと読む）が居合わせ、鳴神は腰を打って痛くて動けず、治すよう医師に強引に頼みます。医師の荒い針治療によって治った鳴神はそのまま天界に昇ろうとすると…狂言の解釈ならではのおめでたい演目です。

究極のメルヘンは人間が神に治してもらおうのではなく、神様が人間に治療をしろらうというものではないかと。そこが一番、狂言っぽいと思って選曲しました。

（茂山忠三郎）

【京舞】

上方唄『浦島』

出演…井上安寿子

おとぎばなしの「浦島太郎」を舞台化した作品。歌詞の冒頭部分へ龍の都の出汐の…のとおり龍宮城をでて乙姫に別れを告げて、故郷への路をたどるところから始まり、乙姫との楽しかった日々を回想、そして玉手箱を開けてからの嘆きと続きます。上方唄の「浦島」の起源は諸説あります。井上流では二世八千代の振付と伝えられています。

浦島太郎が龍宮城から帰って来て思い出している話です。玉手箱も出てきますよ。

（井上安寿子）



Vol.1の舞台より 狂言『因幡堂』

【京舞十狂言】

新作『たぬき』

作：茂山忠三郎 作詞：植木朝子

茂山忠三郎家にとって大切な演目である狂言『狸腹鼓』と地唄『たぬき』をベースにした、京舞と狂言による初の合作です。

東山の麓にすむ狸師が、狸にだまされた大内山の狸師に自慢するため、狸を射止めに夜の瓜生山に入ったところ、尼に化けた雌狸に出くわす。狸師はすぐにその正体を見破り、射貫こうとするや狸に命乞いをされる。

そこで狸師は「狐より（化かし上手）であることを狸が証明できたら助けてやる」と言ったところ：

●お互いどこまで折り合えるか。美しさを探求する京舞と喜劇を追及してきた狂言をどのように折衷するかというのが一番楽しみなところです。（茂山忠三郎）

●たぬきは狐よりも化けるのが一段階、上手な動物と聞いていますので、どのように上手に化けられるのかも楽しみです。（井上安寿子）

井上安寿子（いのうえやすこ）

京舞井上流五世家元井上八千代の長女として京都に生まれる。平成3年、四世及び五世井上八千代に師事。平成4年「四世井上八千代米寿の会」にて初舞台（上方唄「七福神」）。平成18年井上流名取となる。平成23年京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）卒業。平成25年井上安寿子主催の京舞公演（葉々（ようよう）の会を発足。平成30年文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞、他受賞歴多数。

茂山忠三郎（しげやまちゅうざぶろう）

昭和57年京都に生まれる。能楽師大蔵流狂言方。茂山忠三郎家、四世忠三郎の長男。父に師事。四歳にて「伊呂波」のシテで初舞台。平成17年京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）卒業。《忠三郎狂言会》代表、猿楽會主宰。平成29年、五世茂山忠三郎襲名。平成30年度京都市芸術新人賞受賞、他受賞歴多数。



京都芸術劇場 YouTube channel では、2019年度「京舞と狂言 vol.1」ダイジェスト映像や二人の対談、稽古動画を公開しております。ぜひご覧ください。

狂言と京舞の粋^{すい}を詰めた新作

第二回「京舞と狂言」は「メルヘン」のテーマのもと、能楽大蔵流狂言方の茂山忠三郎と京舞井上流の井上安寿子が新作「たぬき」を合作し共演に挑む。2人の家は共に江戸時代から京都にあつて芸を伝承してきたが、同じ演目で一緒に舞台上立つのは初めて。異なる芸能の共演は「言うは易く行うは難し」で、運営方針に「実験と冒険」を掲げる春秋座ならではの企画だ。二つの芸能の既存演目の上演もあり、それぞれの芸能の持ち味を存分に楽しめる会になりそうだ。

狂言と京舞の共演の難しさは、何といても狂言がセリフ劇なのに対して京舞はセリフを一切用いない芸能という点にある。このため、二つの芸能の自分を守ってコラボしようとする和新作を作る必要があつたのだろう。逆に言えば、新作は狂言の笑劇の要素や京舞の規矩の正しさなど二つの芸能の特質を生かした配役や構成・演出になる。

新作「たぬき」は狂言の名作「狸腹鼓^{つみづみ}」と地唄「たぬき」に着想を得て創作するという。物語の舞台は春秋座のある京都・東山。麓に住む狸師が狸を射止めに山に入ったところ尼に出くわ

し、この尼は実は狸の化身というのが味噌。「狸は化かし上手」との言い伝えをもとに物語を展開し、忠三郎は狸を狂言ならではの所作で表し、安寿子は男舞と女舞の両方の披露を考えているようだ。観客に一つの演目で狂言と京舞の粋^{すい}を味わってもらふ構成と言えよう。

芸能の魅力はひと時、煩わしいことを忘れて非日常の世界にいざなってくれるところにある。新型コロナウイルス問題が社会に様々な影を落とすだけに、今回のテーマ「メルヘン」は観客に気持ちを和らげてもらうのに格好。主催者には「とにかく舞台を楽しんでほしい」との思いがあるだろう。一方、忠三郎と安寿子にとっては自身の裁量で創作する機会は貴重。この経験が来年予定される第三回「京舞と狂言」に生かされるとともに、それぞれの芸の糧になることが期待される。

小橋 弘之

(元・日本経済新聞記者)

「たぬき」な、おふたり

京都を中心とした京阪神で発達しました文化芸能を、上方文化・芸能などと言いますが、面白いのは、この文化芸能のそれぞれがトップダウンではなく、個々の特性や主張を内に秘めて共存しているところだと思います。

情報が国を越えて行き来する時代でも、この京阪神というさほど広くない場所でも、それぞれの特性を失うことなく楽しむことができるというのは、豊かなのだと思います。

さて一方、日本は引き算の美学とも言われます。引き算とは、ただ不要なものを引いて消したのではなく、お客様の想像によって、より多くのイメージを湧かせるものをあえて引いているとも言えます。一人一人のお客様の頭の中に浮かぶイメージの中で、演者が生き生きと動き回るのを楽しむというのは、京舞そして狂言にも共通するものではないでしょうか。

このたびのコロナ禍で、生活は一変しました。不要不急の名のもとに、我々芸能者はまさにそのものの象徴のように、公演ばかりでなく稽古も休止を余儀なくされました。ようやく、少しずつこうして再開がされます中、文化芸

能が、人を楽しませ力づける存在として必要とされる、またそうであり続けなければと思いを新たにしました。

受け継いできた芸を今の世に伝えようとする行動力、そして先人に対するリスペクトと揺るぎない誇りをもったお二人の、意欲の塊のような今回の公演が開催されますこと、誠におめでとございます。

狸が色んなものに「化ける」というのは、皆さんご承知の通りかと思いますが、我々芸能の世界で、ある日突然、その人の技芸がめざましく上達・飛躍するのを「化ける」と言います。もちろん、ただ毎日を暮らしているだけで化けたりしません。日々の弛まぬ積み重ねがあつての事だと師匠・先輩から伺っております。

いつ化けてもおかしくないお二人が、もしかして今回の競演をキッカケに、何か化学反応を起こして、「化ける」瞬間に立ち会えるかも知れません。ご来場の皆様、そんなお二人に楽しく化かされてください。

桂 吉坊 (落語家)